

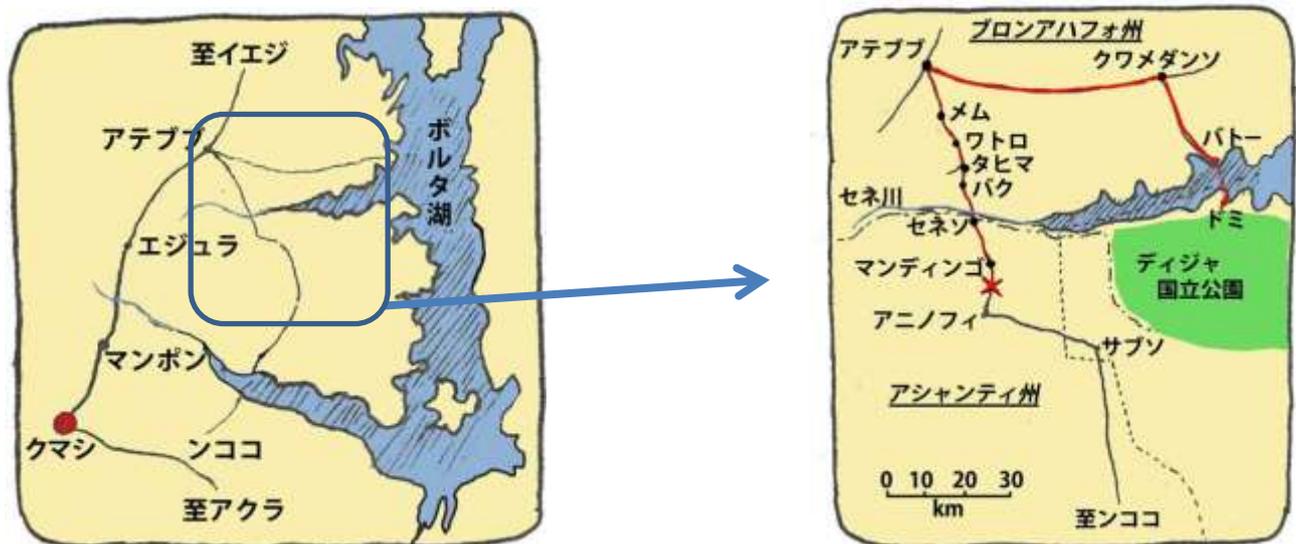
キャメルトロフィー ガーナ国立公園編探検記

「これじゃパリ・ダカだな！」と誰かがあきれたような声でつぶやいた。でもこんな車でパリ・ダカに出場するバカもいないだろう。これが待ちに待った探検の出だしだと思うと気が重くなった。今、車はアテブブを出て数キロも行かないうちにぬかるみに落ち込み、身動きのできない状態なのだ。

噂に知る「ガーナ探検隊」とは、ある時は幻の洞窟を求めて北に、またある時は原生林をさまよい、コブラや罫にも挫けず、前人未踏の地を探検する勇気ある青年である。なんてかっこうのいいことを言っても車が進まなきゃオレたちの探検も進まない。「あ〜あ、本当なら今頃所長宅での新年会で美味しい日本食を食ってたのにな」との邪念が固い決意を弱める。そうなのだ「探検隊は正月にアクラに上がり、所長宅で日本食を食らうなどという、女々しいことをしてはならぬ。」というおきてがある（そうだ）。

今回の探検の目的は、ボルタ湖西岸に位置するディジャ国立公園を含む一帯をアテブブから南下シエラム川までを車で縦走しようというものだ。

参加したのは、探検隊ではおなじみの足達氏（隊長・生物学担当）、任国外旅行の際ニジュール川でピログ沈没に遭い命からがら脱出してきた探検好きの宮田氏（渉外・社会学担当）、ボルタ湖で大物を釣り揚げると張り切って参加の原口氏（会計・撮影記録担当）、そしてケープの料理人こと三宅（料理・言語学担当）。なお福田氏は任国外旅行（パリ・ダカ観戦）のため参加を断念。通訳・自動車整備担当として福田氏のカウンターパートであるミスター・サックに特別に同行してもらった。そして今回一番嫌な目をしたであろうドライバーのミスター・アフリエの計6名である。



—第1日目—

出発前夜まで探検に使う車がなかなか見つからず、結局チャーターできたのはフランス・ルノー社のトラフィックというミニバン。朝9時に車がやってきてさっそく探検の安全と成功を祈りガーナ式と日本式で出発の儀式。

今日はとりあえず拠点となるアテブブまで行き、大晦日なので年越しそばならぬ年越しうどんでも食べようとピクニック気分でクマシを出発。

午後1時マンボン着。かつての足達さんの勤務先の St Andrew's College で鶏を2羽購入。エジュラではP&Tより日本に国際電話で新年の挨拶。そして、夕方6時にアテブブの宮田さん宅に到着。

「食うものをおろそかにする者は、他のことをもおろそかにする。」という信念を持った私は、炊事長として参加したからにはと、初日の夜は豪華にちらし寿司と煮こみうどんを振る舞った。しまった、ガーナ人のことを考えてなかった。あれだけ酸っぱいケンケやバンゲーを食べるガーナ人が、酢が嫌いだという。結局ドライバーのアフリエ氏は朝食のパン以外うまそうに食べたものはなにもなかった。

—第2日目—

これは大変なことはなった。アテブブ唯一のガソリンスタンドに行くと「No Petrol! (ガソリン売り切れ)」。午前中に買い出し等で手間取ってしまったのが失敗だった。これから向かう道路の状況などを含めて公園を管理している Game and Wildlife Department の主任係官に会って話を聞こうとしたのだが会えずじまい。

クマンで一応タンクは満タンにし、予備のポリタン2つにもガソリンを詰めているのだが、この先何か起こるが分からない。しかし悩んでもないものはしかたがない。燃料と走行距離より足りるだろうということで出発したのは午後3時。車がアテブブのメインストリートを南に折れるとすぐにダート。そして私たちを待ちかまえていたのはボコン、ボコンとあいたいくつもの大きな穴。その穴にはクリスマスの時降った雨が溜まっている。この道を普段通るのはヤムを積んだトラクターと自転車くらいのものだ。おかげがトラクターのどでかいタイヤが作った轍に水が溜まり穴を深くしていき、道路は見るとも無残な姿になっており、とうてい普通乗用車が通れる状態ではなくなっていた。それに舗装道を走っているぶんには乗り心地のよいこの低い車高も、ラフロードではちょっとしたギャップでも腹をすってしまふ。トラクターの深い轍に四輪ともタイヤを落とすと腹ぼての亀さんのごとく前進も後進もできなくなってしまう。この先まるで別府の地獄めぐりのごとく「水溜り地獄」「腹ぼて地獄」「砂地獄」が続いているとは誰が思っただろうか。

足達隊長は車を降りて前方の様子を確かめに走っていった。残ったみんなは自分なりに「こっちをこう通り、そしてこう行って」と頭の中でコースを考えているみたいだ。こうして私たちが立ち往生している間にあの黒い中国製自転車に乗ったガーナ人は水溜りをひよいひよいとよけながら行き来しているのではない



か。これはこの道を通いなれたガーナ人に聞くしかない、自転車を止めて聞いてみた。そのおじさんのよると向こうからやってきたという人に会ったことがあるので、私たちの目指すアフラム川までは道は通じているらしい。この先道路も数箇所悪いところはあるがこの車でも通れるらしい。今から言えば自転車でしか通ったことのないガーナ人の言葉を鵜呑みにしたのが間違いだったかもしれないが、彼のいうことを信用して先を目指すことにした。「それじゃ」と言って先に出たのはいいが、穴ぼこで手間取っているうちにその自転車はすぐに追い抜かれてしまったのには舞ってしまった。数キロも行かないうちに長い水溜りがあらわれた。隊長がワークブーツのままビシヤビシヤと入っていき、深さ底の固さをチェック。幸いなことにほとんどの水溜りは底の土が固く、スタックすることは無かった。しかし、かえってスタックを恐れてわざと轍をはずして通ろうとすると柔らかい土にタイヤをとられてスタックすることが多かった。

轍が深すぎて腹をすりそうな場合はカトラスで道路脇の草を切りはらい迂回路を作ってクリア。さすが日頃の草刈で鍛えているだけあってみるみるうちに道ができていく。何よりも助かったのは、スタックして困っていると通りがかったガーナ人がすぐに自転車を降りてきて、「どうしたのか」と聞くまえに私たちからカトラスを取り上げ。道を切り開いてくれたことである。彼らのエネルギーとスピードには異常なものがある。腹ばいになって車の下の土を取り除き、恐ろしいスピードで土を掘りかえしていく。オレなんか探検に来たといいいながら、3万円したアゾロのシューズがもったいないや、とかズボンが汚れるなんていうみみっちい考えが先に頭にうかぶのに、彼らはこう言っては失礼だが、なにかをかぎつけた犬が土を掘る執着心、もぐらが土の中を掘り進む土への愛着(?)を持って、草を刈り、土を掘りおこしている。

しかし、一方でガーナ人に感謝しながら、もう一方では信じられない面を見せてくれるのもガーナ人だ。普通こういった道を車で行く場合、最善の注意をはらって進むものだが、ドライバーのアフリエ氏はどんどんとばしタイヤが砂にめりこんでもエンジンをふかし続けるものだからすぐにスタック。私たちの制止を聞かずに水溜りにつつこみ、ぬかるみにタイヤをとられることも幾度かあった。

こうして数キロ毎の難所の度に私たちは車を降りては誘導の繰り返しのため、もう日暮が近づいているのに地図を見ると進んだのはたったの20マイル。こんな時に一番元気なのはミスター・サック。「私たちは行きます。前進あるのみ。ヤンコー！」と、妙に張りきっている。このままでは今日中にセネ川を越えてむこうのセネソには着けそうにないので、ここから一番近い村タヒマで今晚は泊まることに意見が一致。そのタヒマを目指して走っているのだがいくら走っても村が見えない。そういえばさきほどの分かれ道を左へ進んだのが間違いだったのでは、と心配する声もちらほら。普通地図は道に迷った時に役に立つものだが、必ずしもそうではなさそうだ。ちょっとした思いこみで自分のいいように解釈したり、ガーナのように地図が古すぎたりと様々である。

こういった時に追い打ちをかけるように前方には100メートルはありそうな水溜り。手前20メートルほどは底も固く通れそうだが、最後の20メートルはちょっとやばそうな感じ。と思案してるうちにやってくれましたアフリエ君。ザバ・ザバ・ザバと気付いた時には水溜りの中を車は進んでいた。最後の20メートルでタイヤがだんだん沈んでいく。危ない！車はテールを左右に振りながらそれでもどうにかクリア。私たちははっと安心するまもなくアフリエ氏に文句を言い車にかけよった。

大水溜りをすぎるとすぐに右手に小さい集落が見えてきた。これがタヒマかと思ったが、コンコンバ族の住むバワという地図にはない村だった。村人によるとタヒマは通りすぎたらしい。いつのまにか6時をすぎてしまい、まわりは暗くなりかけている。今晚はこのバワ村ですごすことにする。野宿を予想していたのだが、この探検を通じて結局野営は一回きりで、他は2泊ともガーナ人の好意に甘えて倉庫などを借りられて夜露をしのぐことができた。炉から薪まで用意してもらいすぐに食事の準備。メニューは醤油に漬けこんでおいた牛肉で牛丼。

フィールドに出ても栄養を取るようにと肉をメインにすることにした。ただこの暑さで生肉の保存は不可能なので、肉を醤油とサラダオイルにそれぞれ漬けこんだ。米は洗って十分に乾かし4合ずつビニール袋に小分け。すべて山行の要領だ。夜は焚火を囲んで楽しい宴。キャンプで一番楽しいひとときだ。野外ではバーボンがさらに美味しく感じる。食事の時から私たちを遠巻きにじっと観察している村人はいっこうに帰る気配がない。こんな時のために持って来たシュナppsをチーフに感謝の印に贈ると、チーフは「知らぬ人(ストレンジャー)をこうして村に迎え入れるのは私たちにとっても良いことであり光栄でもある。というのも私たちはみんな一人で暮らしているのではない。いろんな人との交流があってこそいろんな事を学んでいくのだ。」と述べた。

「ストレンジャーを受け入れることなしに何が国際化だ!」とは言わなかったが、「国際化」と口ばかりで何もしない日本のお役所に聞かしてやりたいせりふであった。

ちょうど村の納屋の上を満月が顔を出したのを見て、隊長が突然「出た出た月が・・・」と歌いだした。そのあとは私たちが知っているガーナの歌を歌うと、村人がそれに応えて歌い、楽しい歌の交換とともに夜は更けていった。



—第3日目—

やはり生理現象は我慢できないものらしい。鶏が車の中で卵を一個産んでいた。朝食はトースト・目玉焼き・原口さん特製バンダナフィルターのコーヒー。

9時に村人にお礼を言って出発。といきなり水溜り。水溜りの向こうで待っていた宮田さんが「隊長、変な物を発見!」と言うので行ってみると、道路をアリが行進中だった。砂の壁を作り、数センチおきに兵隊アリが両側から監視をしているではないか。黒い川のようになうて流れていくアリの群は異様な光景だった。

しばらく走ると戸数2、3戸の村に着く。うまい具合に鍬を¥500で買うことができた。釣りの餌用にケンケも買う。セネ川まで数100メートルを村人に案内してもらおう。すぐに道路と平行して右側に川が見えだした。雨季になると水かさが増えてここら一帯は沼地になるそうだ。今まで右に見えていた川が消えたかと思うと突然目の前にあらわれた。川幅は6~7メートル、深さは30~40センチ。流れはおだやかである。村人の指示通り左よりを渡りみごとクリア。

村人が草の茎で作ったしかけにシロアリの巣を餌に魚を釣っている。さっそく原口さんとオレもケンケを餌に挑戦。でもキャストイングといっしょにケンケもとんでしまいなかなかうまくいかない。ケンケのつけ方をマスターしたところで最初のあたり。獲物は20センチほどのヒレが赤く髭をはやした淡水魚。(現地語で「オジャイ」)二人で人数分釣りあげた。

時刻は正午近かったが次の村アニノフィまで行って昼食にしようということで出発。しばらく走ると分かれ道。昨日の例があるので勝手な判断をさけて、二手に分かれて偵察に。

しばらく行くと牛追いの少年がいたが英語を解さず手振り身振りで尋ねたところもう一方の道を行けという。引き返すと足達さんはずっと先にいっているらしく車でおいかけたところ見事に腹ぼて地獄にはまってしまった。さきほど買った鍬がさっそく役に立った。200メートル



ほど先にこのあたりのトラクターの基地になっている農場があった。主人の名を取ってみんなマンディンゴと呼んでいるらしい。さきほど釣った魚をホイル焼きにして昼食。なかなか美味。

マンディンゴ氏によるとアニノフィまでに2か所難所があり、この車で通れるかどうかあやしいという。とりあえず主人を乗せて出発。2キロほど行くと最初の難所に到着。岩の露出した下りの段差だ。脇の草を刈って迂回路を作ることもできない。段差はそれほどでもないのだが、露出した岩にギヤボックスか燃料タンクをぶつけてしまいそうなのだ。

思案する前に第2の難所を見ようということでみんなで歩いていった。500メートルほど行くと長い水溜り地獄。右側はずっと沼。左には大きな木がありどちらもぬけられない。それでも隊長は左手側に広がる草むらを大きく迂回すれば行けると前進を主張。ところが車に戻ってみるとドライバーのアリエ氏は今までのストレスが爆発したのか、これ以上進むことを拒否しストライキ宣言。隊長はそれならトラクターをチャーターしようと言いだした。今晚アテブブからトラクターがやってくるのでそれをチャーターするか、先のアニノフィにあるであろうトラクターを借りるかにかけることにした。隊長とサックはアニノフィまで歩いて交渉に、残った3人はマンディンゴに戻り夕食の準備をすることにした。

夜は鶏をつぶし、チキン・アンド・シチューと鶏肉の照り焼き。食事の用意もでき、7時がきても隊長は帰ってこず。待ちくたびれたオレたちは隊長に内緒で砂肝の焼き鳥で一杯やったところで隊長が帰ってきた。どうやらトラクターはだめだったみたいだ。アテブブから来るはずのトラクターもまだ来ない。11時近くになってやっとトラクターがやってきた。現れたトラクターはアメリカ製のどでかいやつで、これなら水溜り地獄も腹ぼて地獄も何のことはない。

トラクター調達に関して私たちは一日1万セディーまでならと考えていたのだが甘かったようだ。ミスター・マンディンゴは4万セディと言ってきた。でもその額もヤムを運んで稼ぐ儲けからはじき出された妥当な額であることが分かった。このことからトラクターはあきらめざるを得なかった。

そこで私たちは当初の計画を断念し、一旦アテブブに戻りコースを変えクワメダンソーよりバトーに行き、ボルタ湖を渡りディジャ国立公園に直接乗り込もうということになった。

—第4日目—

アテブブまでの帰り道はバカみたいに遠かった。いくら一度通った道とはいえ一日半かけてきた数々の地獄をたった2時間でのりきり、正午前にはアテブブに到着。その足でGame and Wildlife Departmentの係官に会いに行ったところちょうど公園に行くオフィサーがいるのでその人を乗せてさっそく公園を

目指した。

クワメダンソーまでは赤土の未舗装ながら平坦な道で、時速100キロで飛ばしていった。しかし迷惑なのは道を行ききしているガーナ人だ。ものすごい土煙りをあげて車が通りすぎたあとは何も見えない。でも途上国では牛>車>バイク>自転車>人>ゴーツという「道路におけるカースト制度」があり、人が歩いていようがいまいが車のスピードは変わらない。それどころかサックとドライバーはよろついている自転車に向かって怒鳴りつけているのには文化(?)の違いを見せつけられた。

だからガーナ人と車に乗るのはいやなのだ。たった1人の係官のつもりが途中の村で次々と人を乗せ、最後にはウォッチマンまでひろって車は満員に。おかげで砂地獄では重みでスタックの連続。おまけにすぐにオーバーヒートで飲み水をラジエーター水につかわれた。ボンネットを空けてびっくり。なにがルノーだ。エンジンはニッサンじゃないか!とうとうあと2キロというところで最大の砂地獄に行きあたり、ガーナ人を乗せることを拒否。歩いて行ってもらうことにした。アクシデントは砂地獄をどうか脱出した時に起こった。勢い余った車が下り坂途中にある岩に前輪をぶつけたのだ。500メートルほど走り異状に気付いたサックが調べてびっくり。右前輪を留めているナットが外れて前輪はカタカタ。来た道を引き返して幸運にも部品を見つけることができた。ここはサックに全てを任せることにして、楽天家の隊長は昆虫採集に行ってしまった。30分後応急処置でなんとか修理完了。慎重に行けよとの思いはガーナ人と日本人のあいだじゃ異心伝心では無理なのか。まるで故障を忘れたかのようにアフリエ氏は車を飛ばす。「もう信じられな〜い!」

ボルタ湖畔の村バトーに到着。そこからはカヌーに乗り換え15分で対岸のドミの村へ。宮田さんは一人サンダルだ。どうやらニジエール河での教訓からいつ沈んでもいいようにしているらしい。カメラをしっかりと抱きかかえて乗船。ドミはまあまあ大きさの村で土壁の小学校もあり、自転車も走っている、ボルタ湖ができて村が孤立したのだろう。

突然「ミスター・ミヤータ」という声。探検に来て名前を呼ばれるなんて、と思ったら宮田さんの学校の生徒だった。

村のはずれに公園の事務所があった。事務所と言っても他の民家との違いはトタン屋根くらいのものだ。今晚は探検最後の夜なのでガーナ人の世話にならず、湖畔にテントを張ることにした。流木を集めてさっそく夕食の準備。マリネにしておいた牛肉を炒めたり、非常用の缶詰もあけて最後の夜を楽しんだ。

夕食後隊長が突然パンツ一つになり、釣竿を持って湖に入っていった。サックが「そうです覆水盆に返らずです。」と突然言う。どうしたのだと聞くと、「一度釣った魚はもう湖にはかえりませんです。」

語学の専門家として言語習得は非常に興味のあるテーマだが、語学は本人の素質もさることながら教える人の人格(?)も反映するものだろうか。サックの変な日本語はきっと師匠の福ちゃんの影響に違いない。

野外で炊き火をしていると見たこともない虫がたくさん集まって来る。隊長は虫捕獲用の試験管とビニールホースを組み合わせた器具を取りだし、珍しい虫を見つけるとどンドン吸いこんでいく。たまに中に綿をいれるのを忘れて虫を口の中に吸いこんでしまうことがあるらしい。

「それじゃ吸ってもらいましょうかね」とみんな珍しい虫を見つけると隊長を呼んで、吸い取り器で吸ってもらう。その虫も全て隊長は釣りの餌に使ってしまったそうだ。

ふと回りを見ると森の上あたりが妙に明るい。ブッシュファイヤーだ。私たちは前方をボルタ湖に、後方をぐるりとブッシュファイヤーに囲まれている。耳をすませばバチバチと木の燃える音が聞こえる。真っ暗な闇夜を真っ赤に焦がして燃える火が今にも迫ってきそうだった。

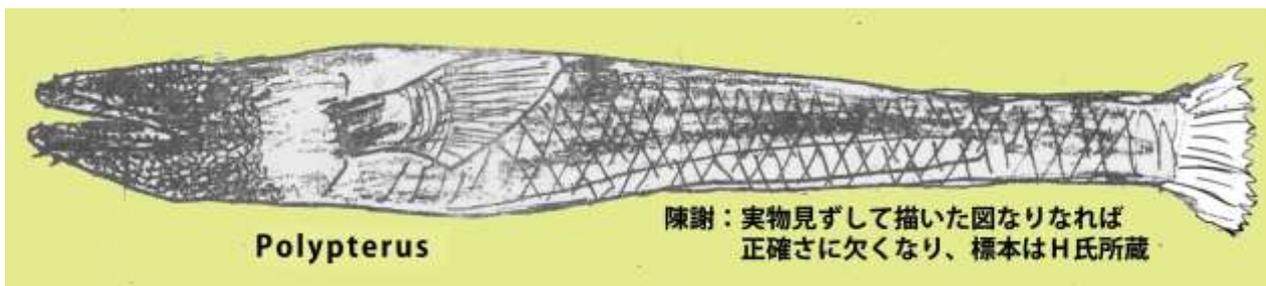


—第5日目—

探検最終日の朝は釣りとブッシュウォーキング。新種発見の多い今回の探検のメインはなんといっても「シーラカンスの子供」であろう。ナマズでもなく、ドジョウでもない。ハ虫類の足の様なヒレのある魚を原口さんが発見。

「ひょっとしてこれシーラカンスの子供じゃないか」と誰かが言ったのをきっかけに、いつのまにか「シーラカンスの子供」になってしまった。乾燥標本にして原口さんと隊長が持って返ったが、帰り道臭くてたまらなかった。現地語で「エジュヤム」正式名は POLYPTERUS (ポリプテルス「たくさんのうろこ」の意)。2属10種アフリカにのみ生息するそうです。

散弾銃を持ち、ベルトには薬莢という恰好だけは立派なレンジャー2人に案内されて2時間ほど公園



内をブッシュウォーキング。ブッシュがすごくてこれ以上進めないの引き返したというまさにブッシュウォークだった。途中昨夜のブッシュファイヤーがまだくすぶっていた場所があった。

ここでも珍しい植物を見つけた。「シンザム」という笹に似た葉を持つ植物で、その実は枝になるのではなく、地面よりニョッキリとはえているのだ。果実はオレンジ色のオクロをでかくした形で現地の言葉で「コー (koo)」と呼ばれ白くて甘い果肉を持っている。

レンジャーによるとこの公園には象がプレンティー (たくさん) いて、今年は政府の命令で森林保護のため大きなブッシュファイヤーができないが、毎年乾期には水を求めて象がこのあたりまで姿を見せるそうだ。ある雑誌によるとセントラル州のフォーレスト・リザーブにも象がいるそうだが眉唾ものだ

な。しかし先日ケープのみずがめのダムで花岡さんがワニをみたそうだからやはりここはアフリカだ。

どこへ行っても帰り道というのはどことなく寂しいものだ。小さい頃家族で街へ行き夜、帰りの電車の窓から家々の明かりの中に人影の数を妹と数えあったのを思いだした西の地平線に沈む太陽が今日はいやに赤くてきれいだ。車はアテブブ目指し土煙を舞いあげながら走っていった。

[完]

注：『トロトロ54号』に投稿した記事に少し手直しをしています。

元のイラストをスキャナーで取り込み、色を付けています。